



第14回年会特集 第2弾 ～年会に参加して～

年会に参加された若手・中堅の研究者から年会の感想を寄せていただきました

▶ 第14回日本エピジェネティクス研究会年会に参加し、ポスター発表をさせていただきました。ちょうど新型コロナが国内で流行し始めた頃、私は大学院生になりました。この一年間でいくつかの学会に参加しましたが、全てオンライン開催ということもあり、実際に他の研究者の方々とお話をすることは多くありません。しかし本年会では、先生方のご講演や議論を通じて研究に対する熱意や思いを画面越しに感じることができ、有意義な経験となりました。

「エピジェネティクスがつなぐ5つの輪」という本年会のテーマにもあるように、エピジェネティクス研究が幅広い領域に広がっていると実感しました。特に、Session3「エピゲノムの医療応用」のご講演が印象的でした。エピジェネティクスは新しい研究分野であると認識していた私にとって、前臨床・臨床に関するご講演は非常に勉強になりました。また、益谷先生のご講演のテーマであるDNA損傷トレランスに興味を持ちました。生物学的意義が不明な「DNA損傷を残したまま複製を行う」現象にどのような秘密が隠されているのだろう、と非常にワクワクしました。自身のテーマに対しても、なぜ？と感じる現象を突き詰められるよう研究を進めていきたいと思いました。

ポスターセッションでは、聞きに来てくださった方々から質問、アドバイスを頂きました。これをふまえて、今後自分の研究を進めていくだけでなく、研究のバックグラウンドや最先端の研究について日々情報収集を行う必要性を感じました。また、私と発表日が同じで聞きに行くことができなかった方の発表に対する議論もチャット上で見られたのは、オンライン開催で良かった点かもしれません。次の発表では、より活発な議論ができるよう精進し、研究活動に励みたいと思います。



鈴木 梨乃

三重大学大学院
生物資源学研究科
生物圏生命科学専攻
博士前期課程1年

▶ エピジェネティクスに焦点をあてた国内最大のエピジェネティクス研究会に初めてポスター発表で参加させていただきました。今回のテーマは「エピジェネティクスがつなぐ5つの輪」で、テーマの通り様々な方面からエピジェネティックな現象を捉え、その謎を追求していく発表とディスカッションはとても刺激的なものでした。今回、コロナウィルスの影響を受け、オンラインでの開催となりましたが、私たちの研究室では、教授や研究室の学生と一緒に大型モニターで発表を映す形で参加し、画面越しでも各先生方の研究の面白さが伝わってきました。また、各発表に対して研究室内でリアルタイムに議論ができ、現地開催とは違ったオンライン学会の良さを実感しました。

各分野における最先端の研究発表を聞き、そのいずれも興味深いものでした。中でも私の印象に残ったのは、立花先生のマウスにおけるオス化遺伝子に関する発表です。性決定に関する遺伝子 *Sry* の新たなエキソンの発見と、その機能解析から証明に至るまでの一連の実験過程は、研究の面白さが詰まっており、異なる分野の私にとっても刺激的であり、興奮しながら発表を聞いていました。また、吉田先生の特別講演では、核輸送に関わる化合物レプトマイシンBに始まり、HDACに関わるトリコスタチンA等、様々な生体内の重要な現象を化合物から明らかにしていく壮大なストーリーに驚かされました。これらの発表を聞く機会を得られたことは今回の学会に参加した最大の幸運です。将来このような場で自身の研究を発表できるように、今後より一層研究に邁進していきたいと思えます。

最後に、近年エピジェネティクスは様々な分野と融合し、その多様性を広げています。その影響は研究内容にとどまらず、本学会参加者の多様性もまたエピジェネティックな影響の一つなのだろうと感じました。



綾野 貴仁

福井大学光学研究科
生物化学研究室
博士後期課程3年



▶ 2018年5月、札幌で開催された第13回年会の帰り道から、私たちの年会準備は始まりました。会場はどこがいいか、懇親会では名古屋めしを食べてもらえるといいね、、、など帰り道ではそんな話ばかりになりました。2020年はオリンピックイヤー(のはず)だったので、テーマやポスターも五輪をからめたものにすぐに決まりました。

さて2020年1月、いよいよ年会の準備も本格的に始まった頃、新型コロナウイルスに関する不吉なニュースが流れました。初めはクルーズ船や一部の地域だけだったので、収まるものと期待していましたが、4月には緊急事態宣言まで出され、結局5月の年会は中止。改めて会場探しです。交通の便のよいインク愛知で日程を調べたところ、年度末にぎりぎりに空きが！その後学会はオンラインばかりで、名古屋から出ることもなくなりました。秋にはGo to travelのイベントが始まり、3月の現地開催への期待が高まりました。しかし、やはり人がウイルスを伝播するのは明らかで、年末に向けて患者数が急増。エピ研幹事の方から、年会はどうするのか、というご心配をいただきました。そろそろ人に会いたいという思いもありましたが、参加者の健康を考慮して、結局オンラインの決定が下されました。

年末からオンラインに向けた準備を開始。準備でバタバタのうちに当日が来ました。画面上ではありますが、久しぶりに先生方の顔を拝見することができ、熱いディスカッションを聞き、懐かしさを感じました。Zoomには常時250名を超える方が参加され、ポスターも盛り上がっていたようでした。閉会の挨拶を聞くと、3年にわたって準備した年会がようやく終わったと、本当にほっとしました。

2020年はまさに新型コロナウイルスに振り回された一年でした。人類の歴史は感染症との闘いの歴史だった、と教科書で勉強はしましたが、スペイン風邪のために世界で2000万人が死亡したと聞いても、過去の話とと思っていました。まさかパンデミックを自ら経験することになるとは。いろいろな活動制限もある中、エピ研の先生方はいつもサイエンスに対して熱い思いを抱いていることを改めて感じました。来年はぜひ博多で皆様方にお会いして、お



新城 恵子

名古屋大学大学院医学系研究科
腫瘍生物学
講師

いしいものを食べながらディスカッションの輪に加わりたいと思います。

▶ 今回、日本エピジェネティクス研究会の年会に初めて参加し、非常に貴重な体験を得ることができました。実は私は学会への参加も今回が初めてであり、右も左も分からないような状態でポスターを作成するのもも試行錯誤を繰り返しました。年会当日も非常に緊張しましたが、専門分野だけでなく臨床や技術開発といった普段触れる機会の少ない研究分野についての講演を聞くことができ、非常に充実した経験となりました。

今回で14回目を迎えたエピジェネティクス研究会年会ですが、新型コロナウイルス感染症の急速な拡がりの影響を受け残念ながら現地開催は叶わず、年会始まって以来のオンラインでの開催となりました。しかし、オンラインツールをフルに活用した発表・議論の場を設けていただき、不自由な状況をもものもしない非常に活発な議論を交わすことができました。私はポスター発表をしたのですが、様々な分野の先生方からご質問やアドバイスを頂戴しました。先生方の多角的な意見や考え方、知識に触れることで、自分の視野や見識を広げられるとても貴重な体験となりました。また、同世代の方々や近い研究分野の方々の発表を拝聴し、エピジェネティクスという学問の面白さを再確認するとともに自分ももっと頑張っていこうと刺激を受けました。一方で、知識不足ゆえに理解が追いつかないことも多々あり、悔しさも残ったためより一層自己研鑽に努めたいと思います。

最後になりましたが、エピジェネティクスに関する様々な研究分野の方々と(対面ではありませんが)交流できた素晴らしい機会を頂いたことに心より感謝いたします。来年こそ研究者の皆様と実際にお会いできることを心待ちにしつつ、今後も精力的に研究に励みたいと思います。



早川 奈緒

関西学院大学大学院
理工学研究科
生命科学専攻
博士前期課程1年



情報を求めています！！

研究員・ポストドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしくお願いいたします。お近くの広報委員に気軽に e-mail ください。

(代表) 中山潤一 (jnakayam@nibb.ac.jp)
佐渡敬 (tsado@nara.kindai.ac.jp)
木下哲 (tkinoshi@yokohama-cu.ac.jp)
大川恭行 (yohkawa@bioreg.kyushu-u.ac.jp)
近藤豊 (ykondo@med.nagoya-u.ac.jp)

日本エピジェネティクス研究会事務局

群馬大学 生体調節研究所
生体情報ゲノムリソースセンター
ゲノム科学リソース分野内
庶務担当幹事：畑田出穂，担当：岩田浩美
住所：〒371-8512 群馬県前橋市昭和町3-39-15
TEL: 027-220-8111
E-mail: jse-jimukyoku@ml.gunma-u.ac.jp